

論文要旨

氏名	星野 行孝
タイトル (日英併記)	Association of personality traits with dental visit procrastination by Japanese university students (大学生を対象にした歯科受診の先延ばしと性格特性との関連に関する研究)

論文の要旨

「先延ばし行動」(procrastination)とは取り組むべき必要性のある物事を先送りしてしまう心理的特性であり、今まで学業との関連が主に研究されてきた。しかし近年、先延ばし行動と健康との関連が指摘され、受診行動が遅れることで症状の悪化につながる事が報告されている。一般に、病気行動には自己調節モデルが知られており、各自の病気解釈によって受診行動につながるとされているが、歯科受診行動についてはあまり報告されていないのが現状である。また、性格特性としてビッグ・ファイブ性格特性と健康行動の関連が知られている。そこで、我々は Sirois らのモデルをもとに、歯科疾患の急性期および慢性期における歯科受診行動の遅れと、先延ばし行動および性格特性との関連を検討した。

本研究は、福岡県内の大学生を対象とした横断調査である。対象者は県内の4大学の健康科学に関連する5つの学科から合計599名の大学生をリクルートし、そのうち、同意が得られなかった者や不適切な回答をした者を除外し、549人を解析対象とした(平均年齢19.7歳)。調査項目として一般的先延ばし尺度(GPS)、ビッグ・ファイブ性格特性(TIPI-J)、口腔衛生習慣を用いた。また、口腔内に急性症状による痛みを自覚した急性期の病気認知、および慢性期の病気認知から歯科受診が必要と判断するまでの日数について尋ねた。その結果、2峰性の分布を示したため、カーネル密度推定に基づき7日をカットオフ値とし、先延ばし群と非先延ばし群の2群に分類した。解析はカテゴリー変数の分析には χ^2 検定を、離散変数の分析にはMann-WhitneyのU検定を用いた。その後、ベイジアンネットワークを用いて、急性期および慢性期における歯科受診の先延ばしとビッグ・ファイブ性格特性との確率的因果関係を分析した。

GPSスコアは急性期および慢性期において2群間に有意差が認められ、急性期では外向性、協調性および神経症傾向、慢性期では外向性、開放性および神経症傾向といったビッグ・ファイブ性格特性と関連していた。一方、口腔衛生習慣については2群間に有意差は認められなかった。次に、ベイジアンネットワーク分析を行ったところ、ビッグ・ファイブ性格特性のうち、誠実性と神経症傾向はGPSスコアと直接的に関連していたが、協調性が歯科受診行動の遅れに対して直接的に負の関連性を示したのは急性期においてのみであった。また、歯学部学生は他の学部学生とは異なり、歯科受診行動の遅れに対して正の関連性を示した。協調性は先行研究において健康状態や健康行動の良好さとの関連や頭痛、インフルエンザおよび消化器系疾患といった急性疾患との関連性が報告されているが、本研究において協調性が急性期に負の関連性を示したのは、協調性が有する2面性が関連しているかもしれない。また、他の学部学生と比べて歯学部学生は歯科受診を先延ばしする傾向にあったが、これは、歯学部学生の口腔衛生状態が比較的良好で、重度なう蝕経験が少ないため、歯痛のイメージに相違点があった可能性がある。加えて、歯学部学生は成績や試験に関するストレスが強く、歯科受診よりも試験準備を優先する傾向があることが考えられた。

結論として、先延ばし行動は歯科受診行動の遅れに直接的に影響する因子であり、協調性は急性期に対して負の影響を及ぼすことが示唆された。